福寿草　黄の花盛り　鉢に満つ　信子
寒風に　まけず老梅　また咲けり　治吉
啓蟄や　仙人掌（サボテン）の鉢　庭に出す　陵南
早咲きも　蕾のまゝに　戻り霜　尚信
苗障子　開けられている　日差かな　白楊
猫の目の　眠たげに見ゆ　春隣　景流
わが春と　紅を散らせる　しだれ梅　治吉
路地ぬける　風沈丁の　香をつれて　信子
売物の　古伊万里壷に　花一輪　尚信
初土筆　厨の妻の　ひとり言　一義
雪渓の　裾に聖火の　ともりけり　一義

吟行句

蓮池の　枯茎乱れ　残り鴨　白楊
やれ蓮の　間に間に遊ぶ　鴨三羽　紫杏
春光の　庭一杯に　這柏槇（ハイビャクシン）　陵南
囀に　観音堂の　開扉かな　白楊
花すくな　臥竜老梅　昼ひざし　紫杏
順教尼　写経せし庭　落椿　陵南
梅一輪　輪廻転生　慈母観音　一義
濡縁の　日向ながらも　風料峭　白楊
三代の　臥竜老梅　馥郁と　生雄
人影に　郡れ来し緋鯉　水温む　生雄
蹲の　水も温むや　勧修寺　白楊
年経るも　万両一本　すくと立つ　一義
水温む　二億の年経し　臥牛石　陵南

第八十回　平成十年四月十日（金）

兼題　『つちふる』（黄塵）『貝』（蜆・蛤など）
『焼く』（野焼・山焼・芝焼・菰焼など）
『竹の秋』と当季雑詠。
吟行　『醍醐寺』境内一円と『三宝院』庭園

秀吉以来桜の名所としてあまりにも有名な醍醐を訪ねましたが、暖冬のため開花が早く落花の醍醐寺吟行となりました。

兼題句

大あくび　二ツ三ツの　花日和　尚信
乃木神社　万朶（バンダ）の花に　人すくな　陵南
畦の火の　尾花にたどり　立上がる　白楊
泥吐かぬ　蜆もありし　現世よ　紫杏
陵南
一義　余生とは　いつからなるや　春惜しむ　治吉
白楊　幸せを　蛤の碗　婚の膳　生雄
生雄　野焼きする　煙の先に　城一つ　陵南
生雄　蜆汁　今日も一日　暮れにけり　恕
白楊　雨煙る　湖尻一舟　蜆掻く　白楊
一義　土ふりて　ほのかな姿　浮御堂　恕
道祖神　周りは刈りて　野焼きかな　白楊
飾られし　古雛思出　あまたかな　信子
燻られて　焼野の径に　道祖神　生雄
降る雨に　花の衣や　石佛　陵南
藁しべに　束ねし馬刀（マテ）の　磯土産　生雄
紅枝垂　己が影に　触れんとす　白楊
帰り時　土降る宵や　月赤し　尚信
笹束を　片手に守る　畦火かな　生雄
二三日は　掃くまじ今は　竹の秋　紫杏

吟行句

醍醐寺や　残り桜に　蝶一尾　陵南
鯉跳ねて　くずれ果てたる　花筏　白楊
落下さかん　青空に向け　五重の塔　陵南
三宝院　土橋石橋　水ぬるむ　紫杏

第八十一回　平成十年五月二十九日（金）

兼題　『薫風』『若葉』に『鯖』『わさび』
『鯉のぼり』と当季雑詠。
吟行　嵯峨『清涼寺』通称さが釈迦堂
句座　清涼寺山内　湯どうふ『竹仙』

兼題句

廃屋の　柿の若葉や　人恋し　生雄
風凪いで　良き日くつろぐ　鯉のぼり　生雄

俳句同好会

世話人　星野紫杏
石崎陵南

俳句同好会も回を重ねて八十六回を開催することが出来ました。

久保白楊さんのご指導と、ご参加の皆様に有難く厚く御礼申し上げます。

初めから、星野が吟行先と句座の下見、参加人数の確認、句座の予約、戴いた投句の整理、京電協会報に掲載すべき原稿としてまとめることをさせて頂いておりましたが、星野の個人的な理由で暫く石崎君に交替して頂きます。

第七十八回　平成十年一月二十三日（金）

兼題　『新年』『年末・年始』に関わりある物事。
句座　西洞院四条下る　割烹『家紋』

兼題句

貼り替えし　庫裏の三方　白障子　紫杏
何映す　卑弥呼の鏡　寒の入り　一義
一病と　つきあいつゝも　寒に入る　景流
木守とは　云えず鈴なり　熟し柿　紫杏
前を行く　寒行僧の　脚速し　陵南
水尾曳き　鳰立駆けり　雪の池　景流
稲穂とて　注連にまつらる　とは知らず　治吉
色香まだ　残る着ぶれ　年増かな　生雄
余生なお　御託ならべて　屠蘇かわし　一義
厳寒に　聖火ランナー　古希の友　陵南
遅れ書く　賀状かゝえて　走り初め　一義
大寒や　一人暮らしの　コップ酒　生雄
書初や　納得いかぬ　もどかしさ　治吉
沸きすぎの　初湯めでたく　溢れけり　白楊
大発会　電光株価　乱高下　紫杏
朽ち末社　注連替へられし　淑気かな　治吉
不景気に　注連焚く火まで　細きかな　陵南
児に屠蘇を　酌めば母まで　杯廻る　信子
歳末を　妻は二日の　旅支度　一義
煩悩も　余韻となりて　除夜の鐘　尚信
桃陵の　石段登る　四温の日　陵南
屠蘇の酔　微風迅風　なすがまゝ　治吉
番傘の　小雪を拂ひ　堂に入る　生雄
初ゑびす　久しき知己に　出合ひけり　信子
木洩れ日を　拾う細道　笹鳴けり　景流

第七十九回　平成十年三月六日（金）

兼題　『種』『苗』春の『鳥』春の『食物』と当季雑詠。
吟行　山科『勧修寺』と『佛光院』
句座　京料理『魚善』

今回の吟行は樹齢七百五十年の『這柏槇』（ハイビャクシン）の名木や、早春に黄色い花をつける『山茱萸』（サンシュユ）の木など珍しい木と出会い、また十七歳で狂人に両腕を切断されながら、書と日本画に精進し終生身障者のために尽くされた大石順教尼の旧址を訪ねる事が出来ました。

兼題句

昼は昼　夜は夜の色に　山眠る　紫杏
老妻が　手をそう脚立　飾り取る　陵南
春苗を　留守屋の門に　置き帰る　尚信
切る前に　まず振って見る　種袋　白楊
春の雪　白大文字　筆太に　生雄
菜種梅雨　石仏黒衣　着たるごと　景流

吟行句

鮎汁も　出されて川辺の　句座なごむ　信子
流れ藻を　追ってたおやか　鮎走る　一義
鮎の里　句座に集ひし　友九人　景流
激つ瀬を　のぼりつめたる　鮎若し　一義
盲ひたる　焼鮎食し　供養とす　一義

第八十四回　平成十年十月一日（木）
兼題　『橋』『月』『山』『野』を詠み込んだもの
と当季雑詠。
吟行　山科『毘沙門堂』
句座　京料理『ひのき』

長引く秋雨前線の停滞で、天候の心配をしていましたが、当日は曇天ながら降雨はなく楽しい半日を過ごすことが出来ました。

兼題句

橋渡り　切りて花野の　風匂ふ　信子
無月日々　野分のせいと　傘を持つ　治吉
傘雫　振って暖簾（レレン）の　無月かな　白楊
にらみつけ　にらみ返へされ　鬼やんま　尚信
羽抜け軍鶏　落武者めけど　頭は高し　白楊
大橋を　渡る思案の　赤とんぼ　尚信
芒野を　湖へ色なき　風渡る　白楊
石垣に　夜目にも白し　垂るる萩　信子
愛宕の灯　家並切れて　虫しぐれ　治吉

第八十五回　平成十年十一月十二日（木）
兼題　『朝霧』『柿』『大根』『台風』『鳥来る』と
当季雑詠。
吟行　嵯峨『大覚寺』
句座　『林治吉』氏宅

兼題句

過疎の邑　挽（モ）ぐ人もなく　柿あかり　景流
里便り　親芋子芋　届きけり　信子
背のびせる　大根肩の　青さかな　治吉
盗むには　天の蒼さや　柿の里　一義
口にせる　風呂吹き大根　俳味かな　景流
照葉して　鳥来る方の　道しるべ　紫杏

霜枯れの　蓮を折らすや　鯉の鰭　景流
改築の　礮音聞ゆ　菊日和　信子
神木も　倒木となり　秋深し　治吉
拝殿を　句座に拝借　神の留守　白楊
七五三　母子着かざる　日和かな　尚信
朝霧や　地蔵詣での　姥車　白楊
大根の　積まれて白し　樋洗ふ　尚信
友逝きて　時雨に急ぐ　遠き道　白楊
思惟菩薩　お膝にとどく　冬日かな　信子
吟行句
嵯峨菊や　弱法師めく　夕日影　白楊
背の高き　嵯峨菊宸殿　囲みおり　陵南
名刹の　池を包むや　今朝の霧　三木

千枚田　等高線を　植え終わる　紫杏
我慢して　聞く小言にも　わさびかな　生雄
引揚の　記念公園　風薫る　信子
名水を　受ける媼に　若葉風　陵南
託児所は　昼寝の刻や　鯉のぼり　生雄
柿若葉　陰に休らう　老農婦　景流
わさび沢　穂高ははるか　雲たれて　恕
蝸牛　のけぞりながら　瘤越ゆる　紫杏
今年竹　皮をぬぎぬぎ　親を越し　治吉
薫風や　橋立方より　股をぬけ　紫杏
春泥に　渡板（ワタリ）の置かれ　花舗の灯へ　白楊
半袖も　長袖もあり　走り梅雨　尚信
今日も雨　矢車のみの　幟り竿　紫杏
鯖一尾　選んで夫の　誕生日　信子
レッカーの　延びしアームに　鯉のぼり　尚信
吟行句
薫風が　生の六道　吹きぬけて　恕
万緑の　嵐山雨に　靄のぼる　景流
二百年　経つも記念樹　若葉かな　陵南
広目天　修理にお留守や　梅雨の寺　白楊

第八十二回　平成十年六月二十五日（木）
兼題　『虹』『衣がえ』に『心太』『団扇』『鳥』
と当季雑詠。
吟行　大津市『石山寺』
句座　志じみめし『湖舟』

兼題句

ここからは　真面目の話　団扇おく　白楊
店先の　椅子に団扇も　そへられし　信子
梅雨晴や　干せし肌着に　陽の匂い　尚信
風呂上り　夫の使える　古団扇　信子
新しき　夜着を以てす　更衣　白楊
幼児や　虹の一色　多くなり　陵南
濯ぎ場の　失せし護岸や　行々子　景流
梅雨晴や　烏騒動　集塵日　紫杏
縁将棋　団扇は帯に　さしせま、　陵南
呼び込みも　団扇が主役　炉端焼　尚信
口隠し　目でもの言はす　団扇かな　生雄
札所梅雨　ゆらぎはげしく　灯の一つ　白楊
神木の　青苔と注連　梅雨じめる　紫杏
夕立に　遠目の比良は　隠れけり　紫杏
新緑を　仁王出られず　片わらじ　白楊

第八十三回　平成十年八月一日（土）
兼題　『サングラス』『鮎』『入道雲』『海の日』
『釣しのぶ』と当季雑詠。
吟行　今回は福知山の堀電気工事（株）のお招きで土師川畔へ、目の前で鮎漁を見せて頂き乍ら川原の句座で、天候にも恵まれ参加者も九人と多く、大変楽しい一日でした。

兼題句

胸豊か　二の腕まぶし　サングラス　一義
水打って　待たる、人を　釣忍　生雄
鮎押さへ　骨抜く指の　白さかな　白楊
壊えし塀の　凌霄（ウゼン）花垂れて　陰をなす　景流
端居して　海の日に見る　琵琶湖かな　紫杏
バツチョ笠　蜻蛉休ませ　鮎釣師　生雄
もぬけても　空蟬幹を　離れざる　景流
笛を吹く　婦人警備の　サングラス　景流
サングラス　額に上げて　品定め　生雄
鮎宿に　職様々の　釣師かな　信子
サングラス　すゞしき瞳と　思いきや　治吉
瘤動く　入道雲や　道遠し　白楊

俳句同好会参加者

大和電設工業（株）　栩谷　四郎
（株）デリブ　林　治吉
光星電工（株）　久保　白楊
（株）淀電気水道工業所　田中　生雄
（株）オリヂナル電設　石崎　陵南
（株）トーエネック　新谷　景流
日本システム工業（株）　三井喜代治
洛南電気工業（株）　原田　恕
堀電気工事（株）　堀　信子
川鉄電設（株）　下里　尚信
（株）トモエ屋　星野　紫杏
ゲスト参加　三木　一義
職別国保

俳句同好会

世話人　石崎陵南

俳句同好会発足以来回を重ね、今年中には百回目の例会を迎える見込みとなりました。

星野さんより世話人を引継ぎして、ほぼ一年が経過しました。新しく御参加の方もあり、一同大変欣んでいます。平成十一年中に八回の句会を開催し、その句会で入選句となったものをご報告申し上げます。（今年から会報に掲載するのは一回一人で三句までとしました。）

第八十六回　平成十年十二月二十二日（火）

兼題　『都鳥』『毛布』『焚火』『牡蠣』『冬ぬくし』

と当期雑詠

句座　四条川端上る『京新山』にて

兼題句

手相見は　今日より毛布　膝にかけ　陵南
焚火跡　まだ消し水の　湯気残り　白楊
せきれいや　次の声なく　消えにけり　紫杏
冬ふぬくし　湯沸かし無きまゝ　仮厨　信子
大あくび　なかばで止まる　寒さかな　尚信
鳴りさうで　鳴らぬ風鐸　野分かな　紫杏
夫土産　まだ暖かき　牡蠣の飯　信子
日当りを　まず賛められて　冬ぬくし　陵南
近隣を　気にしつゝ焚く　落葉かな　尚信
冬ぬくし　庭のさつきの　狂い咲く　治吉
群れ遊ぶ　ねぐらは何処　都鳥　紫杏
猿山の　ボスも腕組む　寒さかな　陵南
午後一時　棟梁一声　焚火消す　一義
冬ぬくし　碁仇正座　くずしけり　一義
流水を　しばしとどめて　都鳥　尚信
縁側で　爪を切る朝　冬ぬくし

第八十七回　平成十一年一月二十八日（木）

兼題　『年末年始に関するもの』と当期雑詠

句座　祇園中末吉町『梅田』

兼題句

墨やよし　御慶の声に　筆を置く　治吉
読み返す　賀状の添え書き　女文字　一義
干せる池　底の薄氷　日に光る　紫杏
四温の日　子等の混声　遠近に　治吉
自然食　廃れし御代や　小豆粥　景流
山茶花や　しるべの石に　色そへり　紫杏
聾妻が　裏戸を叩く　宵戎　白楊
飾海老　餅に括られ　鬚招く　白楊
着飾れど　歩幅変はらず　成人式　一義
一畝の　菜園に鍬　始めとす　信子
一年の　計も決まらず　小正月　尚信
全裸なる　立木を透ける　鎌の月　景流
脇宮は　小銭で願ふ　初詣　尚信
よべ鋭鎌　今宵月蛾眉　春きざす　白楊
初旅は　播州赤穂　塩饅頭　一義
七種唱　節つけ孫に　教へけり　陵南
ゆらゆらと　髪飾り穂の　祇園路地　陵南
手り甲の　皺をつまみて　冬日受く　治吉

第八十八回　平成十一年三月三日（水）

兼題　『桃の節句』と『雛祭に関するもの』

と当期雑詠

吟行　『大山崎山荘』『宝寺』『離宮八幡宮』

句座　ＪＲ山崎駅前ラウンジ『ＨＩＲＯ』

兼題句

日の匂い　セーターの背に　ためており　紫杏
山茶花の　散り敷きつめて　尚咲ける　治吉
母老ひて　針の供養も　絶へしまゝ　尚信

芋のへた　花まで付けて　茎たてり　生雄
冠の　纓結びかね　雛用意　白楊
四芽の花　目を分けあひて　福寿草　信子
孫なくて　母の形見の　雛かざる　紫杏
老たれば　命惜しみて　二日灸　生雄
黄金虫　小さき春の　使者ならむ　陵南
舗装絶へ　墓春泥の　果にあり　白楊

吟行句

三川を　集めてかすむ　男山　生雄
菜の花や　道三偲ぶ　油座の跡　景流

第八十九回　平成十一年四月二十七日（火）

兼題　『草の芽』『葱坊主』『遍路』『長閑』

と当期雑詠

吟行　『六波羅蜜寺』

句座　『京新山』

兼題句

土産にと　キャディのくれし　蕗の薹　陵南
古城なる　自刃座石の　落花かな　陵南
コーランの　聞こえさうなる　葱の苞　白楊
季がさなり　さけて通れぬ　春爛漫　尚信
さゝやかな　菜園に立つ　葱坊主　信子
ぼんぼりの　仕舞忘れし　花の跡　生雄
蜂も来て　畑の賑ひ　里長閑　信子
捨て苗か　芥の山に　葱坊主　白楊
根芍薬　買えば花芽の　三つあり　紫杏
花見行　冷えの解かれし　一と日かな　信子
三日目の　遍路御詠歌　そろひけり　生雄
水尾走る　昏るゝを知らず　鴨の陣　景流
山長閑　鳩くゝみ鳴く　若葉雨　景流

第九十回　平成十一年六月十日（木）

兼題　『緑蔭』『蛇』『かび』と当季雑詠

吟行　『熊野神社』と『真如堂』

句座　『京新山』

兼題句

青大将　隣の空家に　もどりけり　陵南
柿若葉　画き短き　文の来る　尚信
かび餅や　昔を思い　削りとり　陵南
大庇　陰より緑蔭　へと拾う　白楊
雨近し　矢車はげしく　廻りけり　信子
背戸に干す　越中の下　蛇奔る　白楊
緑陰に　歩を止めて見る　万歩計　陵南
脱ぎ捨てし　姿のまゝに　蛇衣　治吉
踏まれゐる　天邪鬼殊に　黴にけり　白楊

吟行句

槍投げの　さまに菖蒲の　葺かれけり　白楊
狗犬も　口を阿に開け　夏来る　紫杏

第九十一回　平成十一年八月二十四日（火）

兼題　『炎昼』『祇園会』『蚊』『睡蓮』『夕焼』

と当季雑詠

吟行　『桂離宮』

桂離宮は初めての人もあり天候にも恵まれ大変楽しい一日でした。

句座　『京新山』

兼題句

艶話　佳境に薮蚊　ひそみおり　一義
老妻と　洗ふ墓石　焼けており　紫杏
老たれば　精進養生　夏越さむ　治吉
夕焼や　泣きじやくり押す　三輪車　信子
われ難聴　祇園囃の　聞えけり　恕
蚊の羽音　老眼鏡を　探しけり　尚信
耳元の　蚊に寝返りの　幾度かな　信子
この鮎は　頭も召せと　貴船茶屋　陵南
ホームラン　見定め団扇　また動く　陵南
炎昼中　へそ出し遊ぶ　嬰二人　陵南
野球の児　吾が町沸かす　炎昼に　信子
炎昼や　通天閣軸に　街ゆらぐ　白楊
蚊ほろせに　追う間途切れし　縁将棋　尚信
我面に　昼の蚊見事　射止めけり　一義
ハイビスカス　愚直に落ちて　ひからびぬ　景流
送り火の　燃え終りたり　吾合掌　治吉

吟行句

睡蓮や　巻葉風にも　目覚めざる　白楊
炎昼の　中に離宮の　静かなる　一義
雨ならず　離宮の池の　あめんぼう　白楊
蝉の声　わけて飛石　ひろひけり　紫杏
止め石の　先に人無き　夏茶席　紫杏

第九十二回　平成十一年九月二十九日（水）

兼題　『夜長』『秋刀魚』『芋の類何でも』
吟行　『相国寺』
句座　『京新山』

兼題句

夫の留守　写経はかどる　夜長かな　信子
蕷蔓の　どかと積まれし　棚田かな　景流
芋夕月　盤に対せる　烏鷺の友　景流
呼び声に　肩越しに買ふ　初秋刀魚　信子
地鎮祭　隣は秋刀魚　焼くらしき　陵南
売れし畑　今年限りの　蕷作り　陵南
換気扇　負けるな今は　秋刀魚焼き　尚信
初秋刀魚　腸フツフツと　焼き上る　景流
夜長にも　老の二人は　早き風呂　陵南

吟行句

相国寺　山門跡の　彼岸花　紫杏

第九十三回　平成十一年十一月十日（水）

兼題　『山粧ふ』『朝寒』『団栗』『千枚漬』『時代祭』と当季雑詠
吟行　『東福寺』山内と『通天橋』
句座　『竹屋旅館』

兼題句

山粧ふ　眞只中へ　保津下り　恕
朝寒や　加茂の中州に　鷺立てり　陵南
団栗を　踏みつゝ山の　札所行く　信子
三川の　交る彼方　山粧ふ　陵南
大仏殿　借景の山　粧へり　紫杏
粧へる　山路菩薩に　赤き袈裟　尚信
軍鶏駆けて　ころげ団栗　咥へけり　白楊
団栗を　掃きゐる朝や　巫女二人　信子
つとめなき　布団にもぐる　朝寒し　夏至
五重の塔　つゝみて山の　粧へる　信子
鎮まれる　不況の街の　朝寒し　紫杏
千枚漬　老舗の暖簾　一字なる　一義

吟行句

夕紅葉　通天橋に　刻を止め　一義
わき上る　まくなぎ通天橋　しのぐ　白楊
一片の　雲さへおかず　山燃ゆる　一義
まだ青き　楓またよし　通天橋　陵南
もみじ散り　葷酒を許さぬ　門に入る　紫杏
人装ひ　山も粧ひて　今日の句座　尚信
行き止り　龍吟庵の　紅葉かな　尚信
常楽庵　澄める秋空　塔水煙　みつへ

俳句同好会参加者

大和電設工業(株)　栩谷　四郎
(株)デリブ　林　治吉
光星電工(株)　久保　白楊
(株)淀電気水道工業所　田中　生雄
(株)オリヂナル電設　石崎　陵南
(株)トーエネック　新谷　景流
宮本電気工事（株）　宮本みつへ
日本システム工業(株)　三井喜代治
洛南電気工業(株)　原田　恕
堀電気工事(株)　堀　信子
川鉄電設(株)　下里　尚信
(株)トモエ屋　星野　紫杏

ゲスト参加
職別国保　三木　一義
元京都市住宅局　野坂　秀男